「森銑三刈谷の会」だより　No. 11

発行　2022年8月20日（月刊・メールでの投稿歓迎）
例会　第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館　参加自由
バックナンバー　刈谷市中央図書館＞森銑三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木　哲 tetsu_s@katch.ne.jp

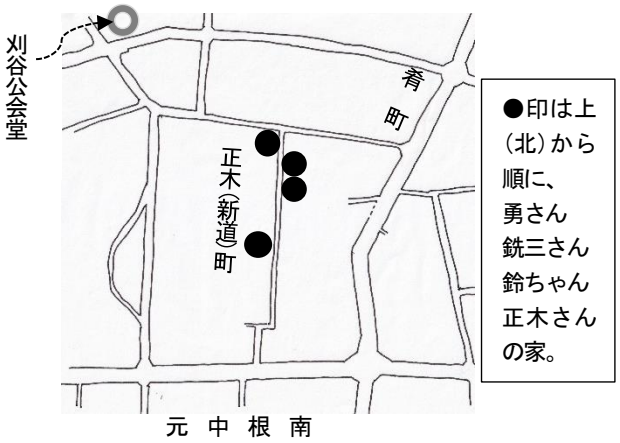

図　刈谷市『刈谷市誌』(1960) 附図「刈谷市商店街の職種別略図（昭和28年6月末現在）」を基に、「正木(新道)町」の七夕の作り物（起し絵）の飾ってあった家に●を付けた。

第11回（2022/7/16）森銑三「愛知県三河の七夕」を読む　＋　正木敦子さん　起し絵の解説
参加14人　　（神谷磨利子）

「愛知県三河の七夕」の初出は池上浩山人主宰の雑誌『ももすもも』1957年7月号で、「起し絵」の副題がある。1903(明治36)年、銑三の尋常小学校2年生の時の七夕の飾りつけの思い出が書かれている。

当時は「たなばた」「天の川」などと書いた短冊を吊るした七夕竹と、起し絵の行燈とを飾り付けたという。起し絵作りは父親の仕事で、森家では「忠臣蔵」の四段目、隣の鈴ちゃんの家は「楼門五三桐」、勇さんの家は「曽我の討入」というように皆、歌舞伎の名場面を題材にしている。

この起し絵について、正木敦子さんに思い出を語っていただいた。正木さん自身には七夕の作り物の経験は無かったが、蔵の整理をしている時に、羽子板の押絵のような美しい三体の「お女中」姿の人形を見つけたという。裏側に串が貼ってあり、何に使うかと思っていたところ、九州日田のひな祭りで同じ形式の人形が藁苞に刺して飾られているのを見て、使い方が分かったそうだ。（九州では「おき上げ雛」というらしい。）その後、安城歴史博物館は2003年の「安城七夕まつり第 50 回記念特別展」開催のために、銑三さんの「三河の七夕」の文章を基に、学芸員の方が正木町界隈での起し絵について正木家に問い合わせにみえた。正木家ではその人形を寄付されたという。その記念展の冊子には、正木さんから紹介された正木町の古橋知次さんの体験談も載っている。古橋さんによると子どもの作る起し絵は七夕の後、笹飾りと一緒に逢妻川に流されたが、大人の作る起し絵は地蔵盆（旧暦 7 月23・24日）の時にも飾られたと書かれている。

森銑三が「起し絵」の名前を覚えたのは後年になるが、当時は漠然と「七夕様の作り物」と言っていたという。しかし安城では「額行燈」「作りもん」などの名前で呼ばれており、全国的には「立版古（たてばんこ）」「組上げ絵」「くみ上げ灯篭」と言ったこと（鈴木哲さん教示：斎藤弘之[2004] 安城市歴史博物館『安城市歴史博物館研究紀要』10・11）、俳句の夏の季語・季題に「立版古」「起し絵」があること（竹中良枝さん）なども話題になった。斎藤（2004）は森の文章について“明治時代に「額」を製作して飾った本人の詳細な記述であり、その史料的価値は高い”（p.144）としている。

続いて森銑三の「ささやかな夜祭」も読み合わせた。青竹の枝々にほうずき提燈をいっぱい吊るし、それに灯をともして熊村の熊野権現に奉納する「八朔」の祭りの体験が描かれている。竹笛と荷車に結いつけた大太鼓・小太鼓の囃子の音、夕闇の田の中の道を揺れる提燈の赤い灯の波を「詩趣の漂ふ祭」だったと回想している。初出は1978年7月号『明治村通信』である。前年77年、82歳の時に最後となる帰郷をしているから、子ども時代の夜祭の一コマが鮮明に蘇っていたのであろう。

参加者の中からこの祭りを体験しているという声がすぐに上がった。尾崎隆さんによるとリヤカーに太鼓を乗せたお囃子とほおずき提燈の列の夜祭は、他にも市原さんの八朔、お天王さん、七日祭、松本奎堂さん、宍戸弥四郎さん、金毘羅さんなどがあり、戦後昭和26年頃までは続いていたという。

長嶌秀雄さんから、正木町から熊野権現に向かう道筋の地勢的な説明があり、詩情あふれる文章を実感として味わうことができた。銑三の文章から刈谷の祭りに話題は広がり、刈谷ならではの発信の場となった。

今後予定

12.　2022/8/20（土）神谷「森銑三の健康法と病歴―銑三の脚気と都築甚之助先生を中心にして―」
※　2022/9/11（日）刈谷市郷土文化研究会第3回談話会 神谷磨利子「森銑三刈谷の会の活動1年」
13.　2022/9/17（土）鈴木哲「森銑三訃報新聞記事」